

知的障害のある生徒に対する否定スキルの指導と般化の検討
- 特別支援学校の教師と学生の連携を目指して -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
藤井 麻由

本研究は、先行研究で効果が実証されている否定スキルの指導パッケージを、特別支援学校の課題学習時間に実施した。本研究での否定スキルとは、「否定選択肢を選択すること」であった。否定選択肢は、選択肢の内容が援助者により決定されてしまうことや、選択肢の拡大が一方的に援助者の判断に任せられることを避けるためのものである。つまり、障害のある個人の自己決定（選択）を保障する自己権利擁護の手段といえる。検討事項は、1）集中指導ではなく、週に2回、1セッション20分以下の分散型の指導でパッケージの適応は可能か、2）カード選択ではなく「現物」選択で否定スキルの獲得は可能か、3）指導場面で獲得された否定スキルが他の場面でも般化したか記録を示すと共に、日常場面に般化するための指導上の工夫や日常環境に必要な変更点の検討であった。

まず、プリファレンス・アセスメントを実施し、お菓子アイテムの好みを分類した。その結果に基づき ベースライン、トレーニング、プローブ、新しいアイテムの導入、カード選択の順で選択指導を行った。その後、学校の先生による活動選択場面での般化手続きを実施した。

結果は、ベースラインで否定選択肢を数回使用したが、同時に否定反応も観察された。トレーニング後のプローブでは、嫌いなアイテムを否定する、特定のアイテムが提供されるまで否定する、という反応を示した。続く新しい選択肢導入では、特定のアイテムへの選好を示した。しかし、次第に「全ての選択肢を否定する反応」が多くなり、反応潜在時間が長くなった。その後、カード選択では始めは幅広い種類のアイテムを選択した。しかし、次第に「全ての選択肢を否定する反応」が多くなった。最後に実施した3日間の般化場面では、1日目は特定の活動を否定する様子がみられた。2、3日目は、「全ての選択肢を否定する反応」が多かった。

これらのことから、お菓子の現物選択では、嫌いなアイテムが提示された場合は否定選択肢を選択して否定する、選択したいアイテムが出てくるまで選択肢を更新し続ける、そして特定のアイテムを選択するという否定スキルの獲得が示された。しかし、援助者が選択肢を増やさず、選択肢の種類が固定化したことや、そうした状況であるにも関わらず選択を急かされることが繰り返された。そのため、選択肢の内容よりも、援助者の存在や課題の時間という場面設定が対象生徒の選択という行動を統制したのである。つまり、選択を急かされる状況の回避として否定選択肢を選択する行動が生起していたと考えられる。活動選択でも一定に否定スキルが確認された。また、指導場面とは異なり対象生徒の行動を統制する要因が多くあることが示された。

最後に、a)プリファレンス・アセスメントとプリファレンス（好み）の変動について、b)「現物」選択と「カード」選択について、c)朝の個別学習における指導パッケージの適用について、d)否定スキルの般化について、e)援助者間（学校の先生と学生）の連携について考察し、今後の課題を示した。